

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第二1:12~24 「思いやり」

[12]「私たちがこの世の中で、特にあなたがたに対して、聖さと神から来る誠実さをもって、人間的な知恵によらず、神の恵みによって行動していることは、私たちの良心の証しするところであって、これこそ私たちの誇りです」

パウロたちのコリント人たちに対する行動は、打算や駆け引きなどという人間的な知恵によるものではなく、聖さと神から来る誠実さによる行動であり、神の恵みによるものであった。パウロはそのことを自分たちの良心も証しし、誇りとしていえると言う。

[13]「私たちは、あなたがたへの手紙で、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません。そして私は、あなたがたが十分に理解してくれることを望みます」

パウロが書き送った手紙はコリント人たちが読んで理解できること以外は何も書いていないので、それを十分に理解してくれることを望むと言う。彼の手紙をあえて誤解、曲解する者たちがいたのであろう。

[14]「あなたがたは、ある程度は、私たちが理解しているのですから、私たちの主イエスの日には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであるということを、さらに十分に理解してくださるよう望むのです」

パウロの願いはコリント人たちが、ある程度ではなく、十分に理解してほしいということにあった。その理解の内容は、主イエスの日、つまり主イエス・キリストが再び来られる世の終わりの時には、自分たちの宣べ伝えた福音によって救いに入れられたコリント人たちが、パウロたちにとって誇りとなるように、コリント人たちにとってはパウロたちが誇りとなるようにというものである。彼らは自分たちを救いに導いた福音の働き人たちに深く感謝し誇るべきであった。

[15-16]「この確信をもって、私は次のような計画を立てました。まず初めにあなたがたのところに行くことによって、あなたがたが恵みを二度受けられるようにしようとしたのです。すなわち、あなたがたのところを通過してマケドニヤに行き、そしてマケドニヤから再びあなたがたのところへ帰り、あなたがたに送られてユダヤへ行きたいと思ったのです」

「この確信」とはパウロたちがコリント人たちの誇りであるという確信のこと。この確信をもってパウロはコリント人たちが恵みを二度受けられるように計画を立てた。すなわち、コリント→マケドニヤ→コリント→ユダヤという旅程である。しかしこの旅程はⅠコリント16:5に書かれている訪問計画とは違うので、彼が今執筆している第二の手紙の前にもう一通の手紙がコリントに書き送られ、そこに彼が今言及している訪問ルートが書かれていたと思われる。これはⅡコリント2:3~4で言及されている多くの苦しみと心の嘆きから、涙ながらに書き送った手紙と思われる。彼はそこで相当厳しいことをコリント人たちに書いたようである。この手紙は今日では現存しない。ところが実際はこの計画とは違った行動をパウロは取って

いた。それをまたコリント人たちが非難していたのでパウロは次節以下でこの計画変更について説明していく。

[17-20]「そういうわけですから、この計画を立てた私が、どうして軽率でありえたでしょう。それとも、私の計画は人間的な計画であって、私にとっては、「しかり」は同時に、「否、否」なのでしょうか。しかし、神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「しかり」と言って、同時に「否」と言うようなものではありません。私たち、すなわち、私とシルワノとテモテとが、あなたがたに宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「しかり」と同時に「否」であるような方ではありません。この方には「しかり」だけがあるのです。神の約束はことごとく、この方において「しかり」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです」

パウロは常に主の導きにしたがうことを第一としていた。それゆえこの恵みを二度受けられる計画も神のみこころに従って立てたというのである。パウロのことばは「しかり」が同時に「否」であるというものではない。彼はそれを神の真実にかけて言い、その真実の根拠を神の子キリスト・イエスに置く。彼らが宣べ伝えたキリスト・イエスは「しかり」と同時に「否」であるようなお方ではない。神の約束はことごとくこの方において「しかり」となったのであり、それでパウロたちはこの方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのである。

[21-22]「私たちがあなたと一しょにキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました」

旧約時代には預言者、祭司、王たちがその任に任じられる時、油を注がれた。同様にキリストにある者も、信仰によって神から聖霊という油を注がれ神の尊いみわざに奉仕するために備えられる。また、この聖霊は私たちが天の御国に入るときの確認の印であり、保証でもある。

[23-24]「私はこのいのちをかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたに対する思いやりのためです。私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために働く協力者です。あなたがたは、信仰に堅く立っているからです」

神を証人に呼ぶとは非常に強いことば。パウロが計画を変更し、まだコリントへ行かないでいるのは彼らに対する思いやりのためであった。それは彼らに悔い改めの機会を与えるためであった。そしてこの計画変更の導きは、他ならぬ神ご自身であったことも知っておかなければならない。→使徒19:21

パウロは彼らの信仰の支配者ではなく、彼らの喜びのために働く協力者であると言う。これを聞いて、パウロを非難しているコリント人たちは恥じ入るべきである。彼は、彼らを愛し、彼らを信仰に導いてくれた大恩人であるパウロを喜びと謙遜をもって迎えなければならない。